

中部の

エネルギーを 築いた

人々

渥美半島開発の父 上村空左衛門

渥美半島は愛知県の田原市全域と豊橋の南西部にあり、東は太平洋側、西は三河湾、伊勢湾側に面し、全長約50km、幅5～8kmの伊良湖岬まで続いた細長い半島である。

上村空左衛門翁は1863(文久3)年に渥美半島の一角、三河湾と伊勢湾に面した渥美郡島村(その後、福江町-渥美町-田原市となる)に生まれた。起業家精神に富み、20代から独力で丸上汽船の個人企業を興し、その後、福江電灯、渥美電鉄、福江信用組合など郷土の公益事業の創業に参画、それらの代表者として活躍した。

今月号は、渥美半島の電気事業、鉄道開発事業に貢献した上村空左衛門を紹介する。



上村空左衛門
[1863(文久3)年～1940(昭和15)]
出典:上村空左衛門抄伝]



渥美半島電気事業の変遷

1 起業家の出発・丸上汽船

上村左左衛門は1863(文久3)年に父・左八、母・もとの長男として渥美郡畠村で生まれた。1887(明治20)年、24歳の若さで海運業の丸上(まるじょう)汽船を立ち上げ、福江～名古屋、田原～牟婁間などに汽船を就航させた。1896(明治29)年に衣ヶ浦汽船(株)を設立し、貨客船・第二明治丸などを建造して、福江～亀崎、福江～鳥羽間、三河湾から伊勢湾の伊勢神社港を結ぶ航路などの開拓に携わったが1915(大正4)に海運業から一切手を引き、その後地域開発に多彩な活動を開始した。

2 渥美半島の電気事業者

渥美半島を供給した電気事業者は福江電灯、田原電灯、渥美電気、豊橋電気(渥美)の4社があり、以後豊橋電気から1939(昭和14)年に東邦電力へと統合された。

(1) 福江電灯株式会社

上村翁は、先ず始めに福江区域の電灯供給に意欲を持ち、地元の経営陣と1912(明治45)年に福江電灯株式会社(資本金：35,000円)の設立に参画、取締役として松渕火力発電所の建設に着手、翌年の大正2年から事業を開始した。

発電所は吸入ガス発電方式を採用し、ガス機関はドイツのオットー社製(出力33馬力)、発電機はWH社製(3相3,300v、出力:20kW)で、大阪の川北電気企業が請負った。

当初の需要家数は323軒(取付電灯数：

1,020灯)であったが、次第に電灯供給の要望が起こり、供給区域も順調に拡大した。一方、海岸地方には避けて通ることのできない塩害の被害もあった。そして20kWの発電所では供給力不足となり、火力発電所を休止して、大正9年に豊橋電気からの買電方式に切り替えた。

この吸入ガス発電方式はガス発生機とガス機関とを装置して発電機を運転するもので、コークス、石炭、木炭を使用する。また、蒸気力発電所に比較して多額の費用を要する煙突、その他複雑な補助機関を備える必要がなく、電気事業の初期における原動力の最初の方式であった。

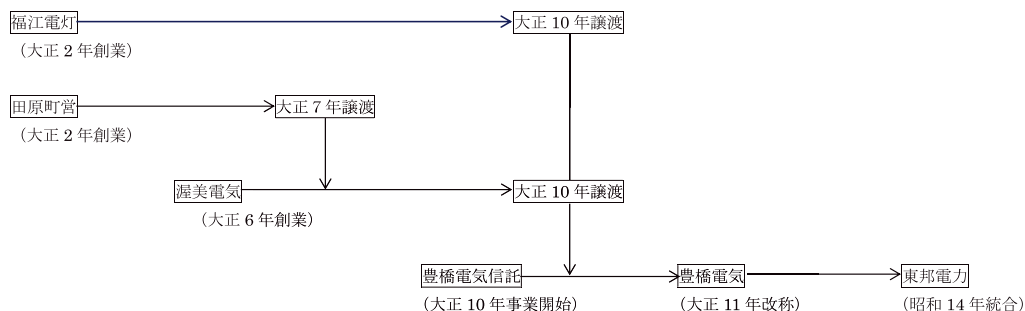
この方式は出力、供給力が小さいものは内燃機関を利用するのが適当であると考えられ、水力を得られない小規模電気事業者の間で採用された。しかし水力発電より経済的な施設とは言いえないため必然的に消滅していった。この地区では福江電灯と田原町営電気が設置された。

(2) 田原町営電気事業

田原町の電気事業は、山本元平町長はじめ地元の有力者7名が発起人となり1909(明治42)年に田原電灯株式会社が設立された。

しかし公益を主とする電気事業のような独占的事业は公営が適当であると考え、田原町が1911(明治44)年に田原電灯(株)の電気事業経営権を買収し、役場内に電気課を新設、大正2年に発電所を完工させた。

発電所は福江電灯と同じ吸入ガス発電方式を採用し、ガス機関はWH社製61馬力、発電



渥美半島電気事業の変遷

機はWH社製30kWであった。

当初の需要家数は298軒の891灯、事業用灯として26カ所の44灯で、供給区域は田原町の中心部に限られた。

(3) 渥美電気株式会社

田原町営電気事業は町営では採算が取れず、経営が悪化したので受皿として渥美電気株式会社を1917(大正6)年に発足させ、新たに豊橋電気の武田賢治専務取締役と今西卓支配人が就任した。そして翌年、田原町営電気から電気事業を譲受け、順調に成績を上げ未点灯区域を少なくしていった。

(4) 豊橋電気信託株式会社の設立から豊橋電気株式会社(渥美)渥美半島電気事業の統一

1894(明治27)年に設立された豊橋電灯

は、明治39年に豊橋電気と改称した。その後、福沢桃介が1908(明治41)年に豊橋電気の株式を買収し筆頭株主となり経営改革を進め、1910年に社長就任、1921(大正10)年に名古屋電灯と合併した。当時、豊橋電気の武田賢治専務取締役と今西卓支配人は辞任し、新たに豊橋電気信託株式会社を資本金200万円で設立した。

そして武田賢治が社長、今西卓が専務取締役にとコンビを組んで就任し、渥美電気と福江電灯を合併、翌年に豊橋電気と改称した。このように旧豊橋電気とは直接の関係はない。

この豊橋電気の2代目社長に上村翁が就任したが時世に抗しきれず、1937(昭和12)年に東邦電力と合併された。

渥美半島の交通運輸会社の設立

渥美半島は昔から海上交通が盛んで、明治時代に入ってから人力車、乗合馬車会社、大正時代に入って豊橋～田原～福江間のバス運行が始まり1921(大正9)年に豊橋自動車株式会社が設立された。その後、1934(昭和9)年から3年余り上村翁が社長に就任し、積極

的な経営を進め業績を向上させた。

一方、地元では確実で迅速な交通機関としての鉄道建設の要望が高まり、1922(大正11)年に渥美電鉄株式会社を設立、鉄道敷設工事を始めた。設立当時の概要、および設立趣意書の一部は次のとおりである。

- (1) 本 社：豊橋市本町29番地
 (2) 資本金：250万円
 (3) 役 員：吉原祐太郎取締役社長はじめ
 15名

なお、役員として豊橋電気株式会社の役員でもあった今西 卓が専務取締役、上村 奎左衛門、武田賢治が取締役に就任した。

- (4) 設立趣意書冒頭の一部

「土地の繁栄は主として交通運輸の便否によりて定まる。渥美半島の地風光明媚にして夏期海水浴場に適するところ多々あるにかかわらず、客の遊ぶものなきは、交通の不便なるによる。沿岸の漁獲豊富なりといえども、これを鮮魚のまま年に送り得ざるは、運輸の設備整はざるによる。もしそれ半島の西岸にある馬草港(現：田原港)のごときに至りては、天然の良港として貨物の散集の地たり。豊橋市の咽喉たるべきものなるにかかわらず、

これを連絡する臨港鉄道なきため、従来捨てて顧るものなかりき。蓋し半島の開発は、交通機関の急施を措きて先にすべきものなきこと、識者を待たずして明なり。…」と記されている。

当初、渥美電鉄の経営は苦戦を強いられたが上村翁が社長に就任後は好成績を上げてきた。しかし1940(昭和15)年に戦時下の交通統合の一環として名古屋鉄道株式会社に合併、渥美線となった。そして1954(昭和29)年に東三河地方のバス交通との関連から豊橋鉄道(株)に譲渡され、豊橋鉄道渥美線として運転されている。

このほかにも福江銀行の創立、1926(大正15)年に福江信用組合を設立し組合長に就任するなど地域開発に貢献し、1940(昭和15)に亡くなった。

なお簡単な略歴は次の通りである。

上村奎左衛門の略歴

西暦	和歴	履 歴
1863	文久3	渥美郡畠村に上村奎八の長男として生まれる
1887	明治20	個人事業として丸上汽船を創業 (福江～名古屋、田原～牟婁間で旅客・貨物の輸送を始める)
1912	明治45	福江電灯が設立され、取締役役に就任
1913	大正2	松渕火力発電所(出力：20kW)完工
1915	大正4	汽船事業から手を引く
1920	大正9	豊橋自動車が発立され昭和9年から3年間、社長に就任
1921	大正10	福江電灯を豊橋電気信託に譲渡
1922	大正11	渥美電鉄が発立され取締役、翌年、社長に就任
1926	大正15	福江町信用組合を設立し組合長に就任
1940	昭和15	死去

(寺澤 安正)